

## 田代よいとこ - その22 -

### なぜすわっているの？ 田代小の金次郎さん

今回は、田代小の二宮金次郎像にまつわるお話です。

#### ◆二宮金次郎について

二宮金次郎は、天明7年(1787)父・利右衛門、母・よしの長男として、相模国足柄上郡栢山(かやま)村(現在の小田原市栢山)に生まれました。天明6~7年は大凶作の年で、相模国でも津久井の農民達が大规模な百姓一揆を起こし、半原の豪商も襲われています。没年は安政3年(1856)。この年にはアメリカの総領事ハリスが着任しています。その3年前にはペリーが来航、幕府に開国を迫っています。金次郎は幕末の動乱を生きた人物というわけです。またこの時期は、幾多の農村が荒廃の危機にさらされました。そういった村の復興に成功して多くの人々の尊敬を集めたのが、金次郎のちの尊徳(正式には「たかのり」)でした。彼の生家はもともと裕福でしたが、4歳の時に暴風雨で酒匂川の堤防が決壊、田畑を失いました。さらに父・利右衛門が14歳の時に、その2年後には母・よしも亡くなります。



金次郎は伯父・万兵衛のもとで農業に励み、艱難辛苦の末、生家を再興させます。このころの勤儉力行ぶりを示すのが、よく知られている薪を背負って本を読んでいるあの金次郎像です。彼は、後に小田原藩の重臣に見こまれ、地元はおろか下野国(栃木県)の農村復興にも尽力することになります。

#### ◆二宮金次郎像について

戦前、多く建てられたのは、薪を背負いながら本を読んで歩いている姿ですが、これは、明治14年(1881)発行の『報徳記』に出てくる話(「大学の書を懐にして、途中読みながら是(これ)を誦(しょう)し、少しも怠らず」)に由来します(「大学」は儒学の經典の1つ)。戦前は金次郎の献身的努力や主家(小田原藩大久保氏)への奉公ぶりが国家の政策に合致したため、学校教育の中にその逸話や金次郎像がはいってきたと言われています。戦中は、像の多くが銅製だったため、金属供出にあって失われます。田代小の初代金次郎像もこの犠牲となりました。進駐軍の指示によって学校から姿を消したわけではないようです。

#### ◆田代小の金次郎像

戦中、銅製の金次郎像は供出され、兵器や弾薬に姿を変えましたが、戦後もう一度金次郎像を造りたいという動きが全国で生まれました。田代小もその一つです。26年度4月号の学校だよりで紹介しましたように、地元の彫刻家・中村博直氏による金次郎像が昭和31年1月に完成しました(台座に刻まれています)。

ではなぜ、戦前のあのスタイルでなく、座って本を読むことになったのでしょうか。それには本校の元教員・新井俊信先生が関わっていました。以下、田代地区にお住まいの甲賀征一さんから伺ったお話です。

新井先生は甲賀さんの親戚で、中村博直さんの知り合いでした。昭和31年頃愛川町は燃糸産業で景気がよく、1世帯当たりの自動車保有台数が県下一だったそうです。当然交通量も年々増加しており、交通事故が心配です。そんな時代背景もあって、次につくる金次郎像は歩きながら本を読んでは危険である、子どもが真似をしたら大変だということになり、今のような形になったとか。それを提案したのが新井先生だったというわけです。

実は田代小の金次郎さんは知る人ぞ知る”有名人”で、昨年11月には、県下の金次郎像ウォッチングをしているという横浜在住の金子さんという方が本校を訪ねて下さいました。また、オンエアされなかったのですが、「噂の!東京マガジン」(TBS)という番組からも取材の申し込みがありました。

平和な時代の学問好きな金次郎像をこれからも大切にしていきたいですね。